

ともに苦しみ、 ともに喜ぶ共同体

〈私たちは兄弟姉妹〉 〈枚岡教会の場合〉

「私たちの共同体に困っているベトナム人がいるので力を貸してほしい」。始まりは枚岡教会信徒の森田さんからシナピスのスタッフにかかってきた電話でした。詳しく話をうかがいたいとお願ひしたところ、枚岡教会の信徒11人がシナピスを訪ねてくれました。

「私たちも警察なんて初めてです」

シナピスへの相談は、弁護士を紹介してほしいというものでした。今回共同体に相談をしたベトナム人のAさんは幼い子どもを2人抱えたお母さん。統合失調症にかかって働けなくなった夫のBさんの代わりに家計を支え、子どもたちを育てています。ある日、仕事から帰ったら家にいるはずのBさんがいません。

心配しながら夜を明かし、あくる日、同じ教会のベトナム人リーダーのCさんと森田さんに相談しました。Aさん一家と親しい森田さんは病気のことを心配し、Aさんと警察に向きました。するとBさんがまさにその警察に不法侵入の疑いで拘留されていました。警察は遂方に暮れるAさんを脅すような口ぶりで問い詰め、国選弁護士も警察側の言い分を繰り返すばかりで全くあてになりません。



訪ねてきてくださった枚岡教会の信徒の皆さん

困り果てた森田さんは枚岡教会の信徒たちや主任司祭の上田憲神父に相談しました。そして共同体で話し合い、弁護士を替えてBさんを助けようということになったのです。シナピスに関係のある弁護士を紹介するなかで見えてきたのは、枚岡教会の信徒たちが、外国出身の信徒を試行錯誤しながら必死で支えている姿でした。

同じ信仰でつながる私たち

どうして共同体で支えることができたのか。責任が持てないということに関わらずに済ませることもできたはず。その質問に森田さんは「病気のことで、警察で感じた外国人に対する差別、これは社会の問題なので、社会で、カトリック教会で受け入れなければならぬ」と思いました。同じ兄弟姉妹ですから」と答えました。同じ信仰でつながっている枚岡教会の信徒にとって、言葉や文化が違うことよりそれは大きなことでした。

もちろん、この関係性は一朝一夕にできるものではない

なく、森田さんたちは教会にベトナム人信徒が増えてきた時、名前を聞き、日本語のできるCさんにまづめ役を頼んで日本人信徒との橋渡しを頼んだそうです。そして日本語教室を開き、関係を深めてきました。ベトナム人の信徒も積極的に教会の清掃や行事に協力し、高齢化が進む教会でなくてはならない存在になっていきました。

信徒の塚本さんは「最初は仲良くなっただけで、でも一緒に悩んだり苦しんだりするうちに、就労や収入のこと、わからないことばかりで、ベトナムの人たちのあり方をもっと知りたいと思いました」と話

しました。おそらくこのよう



クラレチアン宣教会 来日70周年・司祭叙階式

クラレチアン宣教会の創立者聖アントニオ・マリア・クラレットの祝日にあたる10月24日(日)、同会管区本部がある今市教会で司祭叙階式が行われた。

受階者は、ベトナム出身のパウロ・タラン・スン・ニユ・イ助祭。新型コロナウイルスの感染者は10月に入り激減したとは言え、参加者は大幅に制限され、歌無し、ミサが続く中、典礼聖歌アンサンブルの17名が会衆を代表して聖歌隊席で歌った。6名のベトナム人青年はきびきびとした態度で侍者をつとめ、式の様子は同じくベトナム人の撮影チームにより故国にいる新司祭の両親に動画配信された。司式者の前田万葉大司教は「仕合せのクラレチアンの宣教日」と

詠み、「世界宣教の日にもあたる今日叙階されるニユ・イ司祭は宣教師の中で互いに仕え合うしあわせを体験してほしい」と語りかけられた。

新司祭は挨拶の場で「あまり心配し過ぎないで神に信頼して祈ればすべてはだいじょうぶだということを学びました」と述べ、コロナ禍で思い通りに進められなかった叙階式までの歩みを振り返った。叙階式後、クラレチアン



前田万葉大司教の横に座るのがニユ・イ新司祭

教区納骨者および死者祈念ミサ



11月3日(水・祝)午前11時から大阪カテドラル聖マリア大聖堂で限定公開でさげられたミサ。上は、地下納骨堂で行われた灌水の様子。主司式の酒井俊弘補佐司教は「御子イエスをおしてなされる祈りを御父が断ることはありません。このご聖体に寄り頼み、自信をもって死者のために祈りましょう」と呼びかけられた。